

## 台湾・日本、そして私

小川英子 ● 本会理事  
在日台湾婦女会会長



常夏の台湾から寒い仙台に来たのは一九六二年でした。縄文土器に魅せられて東北大学の考古学、日本美術史と日本思想史とを聴講しました。縁あって二年後に日本人と結婚し、家庭の

主婦に納まってしまいました。主人出身の新潟・日蓮宗角田山妙光寺の手伝いや子育てなど日々の生活に追われました。その後、主人の転勤に伴い名古屋、福島、山形、仙台と引越しを重ね、地域に溶け込む努力をしてきました。

平凡な生活の中、時間を見つけては書物、テレビ、展覧会など興味のあった土器、陶器、磁器などに触れるチャンスは断続的にあって、それは生活の中に彩りを添えてくれました。時には現場にも赴き、特に名古屋在住のときは瀬戸、多治見、徳川美術館などへ見学に行き楽し

みました。長い年月を経た瀬戸の登り窯の中に見学できた灰釉壁を窯解体寸前に見学できたことはとても印象深いものでした。

両親とも台湾出身です。きょうだい六人のうち、長女の私と末弟は台湾生まれで、上の弟は東京、他の妹達はそれぞれ中国河北の保定、唐山、と北京で生まれています。一九三九年から一九四六年まで中国で生活しておりました。日本人学校へ通うようになってからは、学校で日本語、家では北京語を使っておりました。

そのころ、北京の住まいの近くには張深切先生一家、日本側への物資調達をしておられた頼おじさん一家、銀行家の翁一家、炭鉱に勤務しておられた陳一家、音楽家の江文也先生が思い出されます。戦後、江文也先生以外、無事に台

湾へ帰っています。もう皆鬼籍に入りました。

私たちは呉三連先生の計らいで、一九四六年十月に多くの台湾人同胞と、唐沽から無料の救済総署派遣の船に乗って基隆に帰りました。船底での生活、漬物のような冬菜、つらい思い出です。上陸のとき、日本人の友達の仕事を書いた帳面、お土産にいただいた千代紙、地球ブランドの鉛筆、赤いランドセルなどは、どこかに忘れてきてしまいました。その時、私の役目は一九四五年十月に生まれた妹をおんぶすることでした。基隆に上陸した時、目にしたのが埠頭にある仕切られた倉庫にあふれるほど日本人が帰国の船を待っていた光景でした。おかつば頭をした、白い袖なしのワンピースを着た小さな女の子がお盆に餅を並べて売っていました。

それからぎゅうぎゅう詰めの列車に乗って父の郷里、烏山頭ダムのふもとの六甲に落ち着きました。全員の服を熱湯消毒しました。髪もキメの細かい櫛で梳きました。

六甲の小学校に編入しました。先生方はまだ日本語、台湾語を使って授業をしていました。

生徒の多くは裸足でした。台湾語しか話さない祖母と会話できず、いとこが通訳してくれました。そのうち纏足した祖母と市場へ菱の実、トウモロコシ、豆の粉にモヤシ、ニラ、牡蠣を入れて揚げたものを買ってきたりしました。

中国、台湾、アメリカ、日本に住み、私は台湾を特に意識したことはないようです。自分はこの国の人であるかもあまり意識しないで生活してきました。大学で中国語を教えていたある日、学生から小林よしのりさんの『台湾論』を見せられショックを受けました。私は台湾のことをわかっていないのだと痛感し、それから台湾に関して勉強を始めました。二〇〇一年からは在日台湾婦女会を手伝い、この間、李登輝学校にも入学し、勉強させていただきました。

長年、台湾政治犯を救う会の三宅清子さんの呼びかけに応え、二〇〇八年末に台湾の野草の若者を支援したことが私の初めての台湾に関心を寄せた行動です。現在も若者たちと連絡を取り合っています。インターネット通してあの若者たちに期待したいと思っています。